

公共の場に立つということ

—自分たちの品位を映すふるまい—

放課後のひととき、仲間と笑い合いながら過ごす時間は、とても楽しいものです。学校での緊張がほどけ、友達と語らい、思い切り笑うーーそんな時間が、毎日の生活を支えてくれているのかもしれません。

けれども最近、「丸岡南中の生徒が駐車場で自転車を乗り回して危ない」「車の出入り口に集まっている通りづらい」といった声が、地域の方々から届くようになりました。実際に、先生たちが足を運ぶと、公共の駐車場やコミュニティセンターなどでそうした姿が見られるとの報告もあります。おそらく、悪気があってのことではないでしょう。

しかし、ほんの少しの油断や軽い気持ちが、周囲の人に不安や迷惑を与え、地域の信頼を損ねてしまうこともあるのです。

「公共の場」という言葉には、“みんなで使う場所”という意味だけでなく、“みんなで守る責任がある場所”という意味も含まれています。私たちがそこでどう振る舞うかは、単なるマナーではなく、その人の「品位」を映し出す行為でもあります。誰も見ていないようで、実は多くの人が見ています。そして「丸岡南中の生徒は礼儀正しい」「使い方がきれいだね」と言われるとき、それは一人ひとりの行動が積み重なって生まれた“学校の品位”なのです。

品位とは、難しい言葉のように聞こえますが、実は「人を思いやる力」のことです。相手の立場に立って考え、「ここで自転車を乗り回したら、車の人は怖いだろうな」「ここで集まつたら、通る人が困るかも」と想像できること。それが、社会に出てからも必要とされる“成熟した人”的第一歩です。

みなさんが地域の人々に見られているのは、決して監視の目ではなく、期待の目でもあります。「この子たちはしっかりしているな」「未来の地域を任せられるな」——そんな温かいまなざしの中で、皆さんは成長しています。

だからこそ、自分の行動をほんの少し立ち止まって考えることが大切です。

公共の場は、地域の人々と私たちが“つながる場所”です。その場所での振る舞いが美しくあればあるほど、地域との信頼の絆は強くなります。

どうか、自転車の乗り方ひとつ、立ち話のしかたひとつにも、自分たちの学校や自分自身の誇りをのせてください。

「見られている」からではなく、「見せたい自分」でいるために。そんな意識をもって行動できることこそ、丸岡南中生らしい“かっこよさ”ではないでしょうか。

【心の中にアンパイアを！！】

いじめにまつわる痛ましい事件が、今も後を絶ちません。ニュースなどでその報道を目になると、胸が締めつけられるような思いがします。加害の側に立ってしまう生徒にも、きっとさまざまな背景があるのでしょう。ゆがんだ劣等感、思うようにいかない人間関係、積み重なったストレス、幼いころのつらい経験…。そのような要因が複雑に絡み合って、誰かを傷つけてしまう行動へとつな



がってしまうことがあります。けれども、どんな理由があっても、人を傷つけることは決して許されません。誰かの涙や苦しみの上に、自分の安心や楽しさを築くことはできないのです。

また、この時期になると、不要なものを学校に持ってきてたり、服装をわざと崩したり、ズルやごまかしをしたりする生徒が少しずつ増えてきます。おそらく、「ちょっとだけなら」「みんなもやっているし」「ばれなければいい」という軽い気持ちがあるのだと思います。けれども、こうした小さな油断やごまかしが、自分を少しずつ良くない方向へと導いていくことがあります。

実はいじめもズルも、根っここの部分では同じです。「それは良いことですか？悪いことですか？」と問われれば、きっと誰もが正しく答えられるでしょう。もしテストをすれば、正答率は100%かもしれません。つまり、みんな頭では分かっているのです。それでも、いざ行動となると、間違えてしまうことがある。そこにこそ、私たち人間が成長していくための課題があります。

あるスポーツ誌の記事に、こんな話が紹介されていました。ゴルフという競技は、基本的にアンパイア（審判員）がいません。プレーヤー自身が打数を自己申告し、同じ組の仲間がそれを確認することで正式なスコアが成立します。つまり、ゴルフは「誠実さ」と「信頼」を前提に成り立っているスポーツなのです。ところが、かつてある若い選手が、スコアを不正に書き換えるという事件を起こしました。マークのサインをもらったあと、トイレでスコアを改ざんしてしまったのです。大きな才能を期待されていた選手でしたが、結果として長期の出場停止という厳しい処分を受けました。誰も見ていない場所で不正をしてしまったこの事実が、何より重く受け止められたのです。

ゴルフの世界では、常にプレーヤーの人間性が問われます。わずかに境界線を越えたボールを「セーフにしたい」と思う気持ちは、誰にでもあるかもしれません。しかし、そこで「アウト」と正直に申告できることこそ、人としての誠実さです。「球聖」と呼ばれたボビー・ジョーンズという選手は、1925年の全米オープンで「打つ前にボールが少し動いた」と自ら申告し、1打罰を受けて優勝を逃しました。ボールが動いたことを見たのは、彼自身しかいませんでした。それでも彼は、当然のように申告をしたのです。周囲から賞賛されると、彼はこう答えました。

「『私は泥棒しませんでした』と言われて、それを褒める人はいないでしょう？私は当たり前のことをしていただけです。」——この言葉には、誠実さの本質が表れています。誰かに見られていなくても、正しいことを選べる。ルールや約束を守るのは、自分の内側の声に従って生きることです。

私たちの学校では、「高々と 悠々と 共々に」という校訓の中で、自然の恵みや自分に関わる人々に感謝し共々に生きてゆく、優しさに秀でた生徒を目指すと謳っています。つまり、自分の心の中にアンパイア（審判）をもつということです。誰かに注意されるから正しくするのではなく、自分が自分に恥じないように生きる——それが、本当の意味での“優しさ” = “強さ”であり、“品位”なのだと思います。

人は誰でも間違えることがあります。大切なのは、そのあとです。間違いを認め、素直に謝り、改めること。そこからもう一度前を向く力こそが、人の価値を決めていきます。誠実に生きるというのは、完璧でいることではなく、「正しい方向に戻ろうとする力」を持ち続けることなのです。学校生活の中では、迷いや葛藤の連続です。人の関係、勉強、自分の将来…。そのすべての場面で、何が正しいのか分からなくなることがあります。そんなときこそ、心の中のアンパイアに耳を傾けてください。「これは本当に自分らしい生き方だろうか」「今の自分に誠実でいられているだろうか」と自問してみてください。

誠実さとは、誰かに褒められるためのものではありません。自分の中にある“まっすぐな心”を信じて行動することです。それができたとき、人は不思議と自信を持てるようになります。誰かと比べる必要もなく、自分の足でしっかりと立っているという感覚が生まれます。

どうか皆さんには、これから日々を、自分に正直に、そして誠実に歩んでほしいと思います。ズルをせず、ごまかさず、人のせいにせずに生きる。そんな生き方を続けた先にこそ、「後悔のない自分であります。たとえうまくいかないことがあっても、自分の選択を信じられる人であってほしいと思います。その一歩一歩の積み重ねが、きっとあなたの人生を豊かにしていくはずです。

